
主アイSS集

y s

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

主アイSS集

【Nコード】

N5331Z

【作者名】

ys

【あらすじ】

ペルソナ3シリーズの主アイ好きがSSを書いてみました。連載という名の短編集。設定変更有。ネタバレ有。キャラ崩壊している可能性あり。文章が稚拙。こんなものでもいいと言ってください方は読んでいただけると嬉しいなと思います。できれば主アイ好きが増えるといいななんて思っています。主アイの恋愛もの(？)が中心。もしかしたら学園ものになっているかも。アイギスと湊が4月の時点で知り合い以上の仲であるという設定。

お話を読む前に

お話を読む前に知っておいて欲しいことをまとめてみました。随時更新予定。

基本方針

- ・主アイメインの短編SS集。よって湊、アイギス以外にキャラが一切出てこないというのもあり得ます。
- ・文章はかなり稚拙なので指導していただけると助かります。
- ・更新は遅めになると思われます。
- ・湊、アイギスは月光館に来る前から知り合い以上の仲で、二人が4月に転校してからさらに仲が深まったという設定です。

登場人物・軽い紹介

有里湊

主人公。『どうでもいい』が口癖。携帯音楽プレイヤーは必須。伸ばした前髪が特徴。普段は冷静で感情を表に出そうとしない。アイギス好き。

アイギス

今回の設定では、4月から湊と知り合い。ロボットではあるが、性格と心は人間らしくなっている。湊第一主義。湊が思っている以上に、湊のことが好きなようである。

有里公子

湊の妹。荒垣命。兄貴と比べるとかなり明るい。みんなとすぐになじめるところが長所。実はペルソナチェンジができたりする。

伊織順平

湊のクラスメート。『テレッテ』が印象的なお調子者。いつも帽子をかぶっている。

岳羽ゆかり

湊のクラスメート。明るく勝気。ひそかに湊を狙う。

山岸風花

湊と同級生。バックアップ担当。内向的だがひそかに湊を狙う第二号。

真田明彦

トレーニングと筋肉とプロテイン第一主義。結構熱い。

桐条美鶴

頭脳明晰な特別課外活動部の部長。お嬢様育ち。それゆえ一般人がやることについていけない時もある。

荒垣真次郎

明彦の親友。訳あって一時的に戦線離脱していた。腕っぷしはかなり強い。見た目とは裏腹に料理は得意。公子に好かれている。

天田乾

部活中最年少の小学生。風花が気になる模様。

コロマル

虎狼丸ことコロマル。かつて主人を失ったが今では活動部の戦力の一員。義理堅い！

エリザベス

ベルベツトルームの住人。テオドアの姉貴。

イゴール

ベルベツトルームの主人。たぶん出番はない。

その他の登場キャラ

時折入れるかもしれない

ストーリー

大筋は本編と同じ。ただ違うのは、

・ 4月の時点でアイギス加入、かつ強化終了。つまり、一月以降のアイギスと同じ感じである。

・ ゲーム中にはないイベントも入れている（予定）。

・ 公子が湊の妹として登場。

・ 一部設定を変更。

その他

・ 順番はごちゃ混ぜになると思っているので、前は春のお話だから次は夏になるとは限りません。1回目は春、次は冬、3回目は夏で4回目が春になることもありえます。

・ 予告なく小説を改造する可能性があります。

・ キャラが壊れている可能性があります。注意！

・ ネタバレ前提なので注意。

以上のことを踏まえたうえで、読んでいただけると幸いです。

主アイin長鳴神社（前書き）

初めて書いたSS。季節が思いつきり外れていますが、ご了承ください。

主アイin長鳴神社

4月は終わり、月はすでに5月初旬。モノレールでの一件は騒ぎにもならず、解決。いつもと変わらない生活。

湊は部活がないので帰宅の路。アイギスはやることもあるといつて先に帰った。

湊は途中、定食屋わかつで、早めの夕食をすませる。まだ日は落ちていなかったので、長鳴神社に寄ってから帰ることにした。あと少しすれば中間試験である。でも大型のシャドウを倒したといっても試験は待ってくれない、無情。どうでもいいことだけれども。なんて考えていたら長鳴神社の前まで来ていた。

誰もいないと思っていた神社の前に見覚えのある後姿を湊はみた。――アイギスである。隣には、彼女のカバンと紙袋らしいものが並んでいた。お参りでもしているのだろうかと考え、声はあえてかけず、そつと近づいてみた。5メートルくらいまで近づいてみても、彼女の声は聞こえない。もう少し、もう少し、とゆっくりと歩を進める。4メートル、3メートル、2メートル、1メートル……

「!？」

気付かれてしまったようだ。アイギスは振り向いて身構えている。

「湊さん……」

湊であるとなると警戒を解除し、安心したかのようにほほ笑む。つられて湊も小さな笑いを見せる。

「ひどいですよ。」

「ごめんごめん。アイギスがそこに立ってたからなんのお願いしていたのかななんて思ってたね。」

「……………」

アイギスは顔をそむける。顔が赤らむ。靴の先で地面をいじっている。やがて決心したかのように湊に向き直る。

「…笑わないでくださいね？」

「いいよ。」

「誰にも言わないでくださいね？」

「わかってるって。」

ためらいがちではあるが、アイギスの口からはこんな言葉が。

「……今度の中間考査で…赤点回避…いや、平均点以上を…」

全部言い終わらないうちに、湊は笑いそうになったのでこらえるのに必死になってしまった。『なるほどね。』なんて言葉も添えて。

「やっぱり笑ってるじゃないですか」

「だって今日なんで先に帰るなんて言ったかわかったような気がしたからさ」

片方の手をポケットからだす。

「問題集とか参考書買ってそんでもってここの神社にお参りして助けてもらおうと。」

そういつて紙袋をとり、中を確認し始める。英文法書、単語集、国語のワーク、数学の問題集、その他諸々…中には合格鉛筆なんてものがある。受験でもないのにな、なんて湊がつぶやくと、

「補習があるのは嫌ですし、先生にも呼ばれたくないので」

とアイギスは反論する。確かにな…と湊は思う。

入院している時に定期テストとは違う学力テストがあった。その時にアイギスは——順平よりはましなほうだが——かなりひどい成績だったようだ。赤点教科もあったらしい。もちろん転校しよつぱらからこの成績はまずいということで先生にも呼び出しを食らっていた。しかもきつい補習というオマケつきで。

「天才にはわかりませんよ」

とアイギスは拗ねてしまった。

湊はおもむろに財布から5円硬貨を取出し、さい銭箱に投げた。

チーンと軽い音がすると、吸い込まれるように箱の中へと小さい硬貨が入っていく。目をつぶりお願いする湊の様子にアイギスは見入ってしまった。あまりに意外と思ったのか口からは『あ…』としか言葉が出なかった。湊は顔をあげアイギスのほうに顔を向ける。

「天才といわれる人だってお願ひするときはお願ひするさ。」

まだばかりとしているアイギスに湊はさらに付け加える。

「でもね、お願ひだけではダメ。きちんと勉強しないとね。」

アイギスは少しムキになったようで、

「やってるでありますよ。」

と口をとがらせる。口調も昔出会ったときのに戻る。

「やってるところ見たことないな。」

「うつつ…。」

図星のようで、アイギスは言葉を返せない。ほぼ笑みを崩さず、湊は紙袋の一つを持つ。

「仕方ないよね。シャドウ討伐が忙しいんだからさ。しばらくはタルタロス探索はしないし、寮に戻ったら一緒に勉強しようか。」

「えっ、あつ、あ…。」

アイギスは突然のことに驚いたようだった。顔がトマトみたいに赤い。湊は空いた片手をアイギスの頬に添える。あたたかいなと感じた。

「その…湊さん。」

『何?』と問い返す代わりに顔を傾ける。

「テストが始まるまでの間、ずっと付きっきりで教えてもらえるとうれしいです。」

彼はアイギスの頬に添えていた手を彼女の左手に移す。

「もちろん。」

二人は手をつないで神社を後にした。

この後、湊がアイギスにつきっきりで教えているとゆかりからプー

イングがきたのだが、それはまた別のお話である。

主アイinクリスマススイブ（前書き）

クリスマススイブの主アイ。

ちなみにアイギスの修理が早く終わって、20日には帰ってきたという設定のもとで書いています。

ゲーム中でのデートは24日なのでクリスマススイブだなと思いつつサブタイトルもそれにしました。

主アイinクリスマスイブ

今日は朝から寮だけでなくクラス、いや学校全体が雰囲気が違う。どこかみんながそわそわしている。湊は考える。もちろん携帯音楽プレイヤーの音楽を聞きながら、だが容易に察することができる。なぜなら今日は…

クリスマスだからだ。

前の学校でもこんな感じであつた。だれもが騒いでいたので結構うるさいように感じた。もつとも、去年の湊は音楽を聴きながら部屋でダラダラしていたのだが…。だが今年は違うななんて思う。

「みな…と…さん？」

おずおずとアイギスが尋ねてくる。彼女のほうから誘ってくるのと違っている。

「今日…クリスマスですよ？ですから今日、一緒に過ごしませんか。あ、そのできれば私たちだけで——」

なんともストライクな誘いである。アイギスと過ごそうかなと考えていた湊は快く承諾する。二人で行く途中、ゆかり達から誘いのメールが来たのだが、断っておいた。せつかくだからアイギスの希望に合わせようということだ。

ポロニアンモールに着くとかなり豪華なイルミネーションで飾られていた。ツリーもイルミネーションで表現されている。幻想的空間。"素敵ですね"と振り向いたアイギスの顔は湊にとっては楽園の中の天使としか見えなかった。"そうだね"とほほ笑みながら答えるとアイギスは湊に寄り添ってきた。

「湊さんと一緒に見るともつときれいに見えます」

「自分は今もつときれいなを見つけたな」

「えっ、どこですか？」

アイギスはあたりをきよろきよろし始める。

「アイギスには…見えないかな。ほら、こっちこっち。」

湊は噴水前にアイギスを連れる。湊が水面を覗くと、アイギスも一緒に覗く。

「どこなんですか？」

「映っているんだけど、みえないかな？」

「夕日だったらこのあたりでは見えないですよ。」

「うーんそれじゃなくて…」

しょうがないなと湊は思いながら、アイギスの手を握る。

「今自分が手を握っている人…」

「!？」

湊はアイギスの手を引いて歩き始める。振り向くと、アイギスの顔は赤く、が、同時ににやけてはいる。

「散歩でもしょうか。」

アイギスは素直にうなづく。二人は並んで歩く。若いカップルや老夫婦、楽しそうな小さな子供たちとすれ違う。それぞれがクリスマスを楽しんでいる。祝福、幸福をもたらす1日。

6時になる。夕日はとくに沈んでおり、店先の明かりやイルミネーションがモールをやさしく包み込む。一回りモールを歩いた二人はベンチに腰掛ける。ひんやりとした感覚。二人の間のわずかな沈黙。

「クリスマスといったらー」

沈黙を破ったのはアイギスであった。

「プレゼントですよね」

それだけじゃないよなと思いつつも湊は「そうだね」と答える。

「これ、作ってみたんですけど受け取ってもらえますか？」

アイギスを取り出したのは30センチ四方の小さな箱。開けてみると、中はショートケーキであった。ために湊は一緒に入っていたフォークで1口食べてみる。

「おいしい…。」

他のことを何も感じさせないおいしさ。続けて1口、もう1口と進んでしまう。

「あ、湊さん。」

「うん？」

湊は食べる手を止めて、アイギスのほうを見る。アイギスは湊の持っていたフォークを手にとると1口分すくう。

「…あーん。」

「…！？ アイギス、さすがにここでは…」

「大丈夫ですよ。今日は特別な日ですし、さつき通った喫茶店でもこんなことやっている人がちゃんいましたし。一度はこういうのをやってみたかったです。寮のみなさんに見られるとはばかられますから。」

「いや、でもその、ね…？」

「嫌ですか…………。」

アイギスはしゅんとする。さすがにこらえられなかったのか湊は観念して口をあける。アイギスに笑顔が戻る。

「では、早速。」

パクつと赤ん坊のように食べる湊と母親のように食べさせるアイギス。アイギスは悦に入り湊はあきらめたのか、最後の1口まで、アイギスの”あーん”を受け続けた。

アイギスのケーキのお返しに何がいいかを湊は考える。少々の間考えた挙句、たまたま入っていた、彼がいつも使っている携帯音楽プレーヤーの予備を渡すことにした。予備とはいってもケースに入れたままなので新品同然である。アイギスはそれを手にするといっしかの少年や少女のように喜んだ。

「大切に使うとうれしいな。」

「あたりまえじゃないですか。絶対に大切にします！」

アイギスは意気込んでいる。喜んでもらえてほっとした湊であった。

それから二人は取り留めもなくいろいろな話をして盛り上がった。学校でのこと、タルタロスでのこと、アイギスが修理中の時のお話雲のようにふわふわと出ては形作られる。気が付けばすでに9時を回っていた。

「もうこんな時間…。湊さんという時間はとても早いです。」
やがて、アイギスは遠くを見る目になる。

「あの出来事の後、私が修理されている間ずっと湊さんのことを想っていました。湊さんがいないとどこか、空白ができた感じで、時間が長く感じられたんです。さびしいとか悲しいとか、そういうのではなくて…。虚無感といったところでしょうか。影人間みたいになっってしまう気がしたんです。」
湊はふうーと息をつく。

「奇遇だな。」

えつと声をあげ、アイギスは彼を見る。

「いつも一緒にいるからわからないけど、いざ君がいなくなると心にぽっかりと穴が開いた感触がしたんだ。大晦日にはしなくてはいけない決断もあるからなおさらだね。心の支えがスツと消えたというほうが自然かな。つらかったといっっては大げさだけでも。花のない庭みたいな気分だったよ。」

「湊さん…。」

「でもよかった。アイギスとたくさん話をして以前のアイギスと変わらないうってわかった時にはホッとしたよ。」

湊は笑う。二人の間の空気がほんの少し暖かくなる。イルミネーションの光は二人をさらに引き立てる。

「自分の一番の大切はアイギスだってわかったときだね。」

湊は自信たっぷりに言う。それはまるで完全に合う一つの答えを見つけたように口ぶりでもあった。

「私だって一番の大切はあなたのそばにることだったって改めて感じましたから。」

アイギスも自信ありげだ。

「えっと…」

アイギスはお願モードに切り替える。

「ずっとあなたのそばにいたいんです。でも、あなたが許してくれないと——。」

「大丈夫。ずっと君のそばにいたいから。許すも許さないも何も、そばにいるよ。君が嫌というまでね。」

アイギスは小さく笑う。

「私が嫌というと思いますか？」

「全く。」

二人はほほ笑みあう。

「湊さん。」

「アイギス。」

お互いの顔が近づく。目をゆっくりとつぶる。唇が重なり合う。甘い時間が二人の間に流れる。そして少しづつアイギスは湊の重心をずらししていく。

「むう……ん……」

「……?!」

湊は少々体勢が悪くなったためか、アイギスに押されてベンチに倒れこむ。アイギスがその上に覆いかぶさり、貪るように唇を当てる。湊はしょうがないなと思いつつ、アイギスにこたえる。…長いようで短い時間。しかし3分くらいキスし続けたようだ。

湊の顔は少々青かったが息が続かなかったからではなく、どこからかの視線を感じたからである。それは多分感じたことのあるものが湊にはわからなかった。

寒くなり、夜も更けるころなので二人は巖戸台に帰ることにした。

「今日は楽しかったね。」

キスの後味を感じながら湊が言う。

「でもまだプランがありますよ。」

「え、まだある…？」

二人は蔵戸台でおりるとアイギスは湊の手を引いて先導しながら、ある場所に向かっていった。

「アイギス、寮とは違う方向だけど…。」

アイギスは湊の言葉を遮る。

「もちろんまだ寮には帰りませんよ。」

「じゃあ、もしかして…。」

アイギス達が着いたのは白河通りのいささか派手でいかにもアレのような感じのホテルであった。大型シャドウが現れたホテルとは別のものであるが。

「ここでクリスマスを過ごすといいことがあると教えられましたから。」

「綾時が？」

「いいえ、でも教えられましたし、把握はしているので。」

そういうとアイギスは（気のせいかもしれないが）いやらしい目つきになってきた。

「ここなら私たちはだれにも邪魔されません。ですから——」

「させるかあ！！」

矢がアイギスのもとへ飛んでくる。

アイギス達が矢が飛んできた方向を見ると、見覚えのある3人——ゆかり、風花、美鶴がいた。恐ろしいことにそれぞれが武器を持っている。風花は武器を使わないはずだが、なぜかロープを持っている。

「とりあえず寮に戻ってもらおうか。処刑はそのあとだ。」

美鶴の威厳ある声。

「アイギス、だめだよ…。うん…。」

風花の嫉妬らしい声。

「散々いちゃいちゃを見せつけてくれたわね…。」

ゆかりの怨念らしい声。

今日のそれぞれ3人はタルタロスの死神より恐怖である。

「さて、まずありさ……。つと、にげるな！」

2人は逃走を始めた。ゆかりたち3人は追いかける。走りながら”せっかくのクリスマスが”とぼやくアイギスに”いいんじゃないかこういうのも悪くはない”と湊。

結局2人は捕まらなかった。理由はというと、公子が2人を部屋に入れてかくまったからである。ちなみにホテルの情報をアイギスに教えたのも公子であるがそんなことはアイギス以外誰も知らない。

主アイi n クリスマスイブ（後書き）

大晦日前にも1つ投稿して、また来年に持越しという形にしたいな
と思います。

主アイi n クリスマスイブ（裏）（前書き）

どうも。皆さんはクリスマスをお過ごしでしたか。

今回は主アイi n クリスマスイブのゆかりサイドがメインです。何気に順平もいます。

湊君とアイギスも出ます。

主アイinクリスマスイブ（裏）

今日はクリスマスイブである。クリスマスの前日にはあるがどこも楽しく明るい雰囲気が校内を漂う。ある者は友達とパーティをする約束をしたり、ちよつとした小物を交換し合ったりしている。いつもと違う現象を起こす1日である。しかし、それとは裏腹に月が雲に隠されたかのようにどんよりとした気が校内の一部で漂っていた。

「お、おいどうしたんだゆかりっち…。」

2・F組前廊下の隅にてまるで影人間になったかのようにしゃがみこんで座って背を向けているゆかりに順平は恐る恐る声をかける。いつもならお調子者だがこの時ばかりはさすがに彼はそうではなかった。

「ほつといて…。今年は…一人か…。」

「あ、ゆかりちゃんもなんだ。私も1人だよ。」

同じく影人間になったかのように暗くなっている風花がゆかりの隣にしゃがみ込む。

「風花ちゃん、まさか…。」

「心配しないで順平君、いじめにはあつていないから。」

そういつて振り向いた風花の顔は、これまでにないくらい暗かった。目がもういつてしまっている。

順平たち3人の後ろを楽しそうに通り過ぎる生徒たち。すべてに絶望したかのようにしゃがみ込んでいるゆかりと風花。

「と…と…、とりあえず一緒に帰らね？おれっちも1人だからさ。」

ダメ元で順平は2人を誘う。彼にいつももありそうな下心はなく、2人を何とかしたいという思いのもとからである。

「…。そうしようか。」

「そうしよう。ゆかりちゃん。」

「え、マジ!？」

ここまですんなりと通るとは正直順平は思っていなかった。が、同時に止めとけばよかったかと思ひ始めたのも事実である。

順平を前にし、どんよりな2人は後ろを歩く。通り過ぎた生徒たちは思わず振り返ってしまふほど、深刻であつた。何とか明るい話題を探そうとしたが、彼のライブラリをもつてしても二人を明るくできそうな話題は見つからなかった。どうこうしているうちに下駄箱にたどり着く。と、そのとき、救ってくれそうな2人を見つけた。真田明彦、桐条美鶴である。わらをもつかむ勢いで順平は2人を呼ぶ。すると、しぶしぶそうではあつたが、彼らの所にやってくる。

「こんなところで呼ぶな。」

真田は順平をたしなめる。美鶴は2人の所に歩み寄る。

「ど、どうしたんだゆかり、山岸。」

「あー、そのー私たち今年はロンリーなクリスマスで…。」

「なんだ、そんなことか。」

「そんなことかつて…。」

ゆかりは少々不満げに言う。

「だったら、一緒に過ごすか。私もひとりだ。」

美鶴の一言で、ゆかりと風花にかかつていたどんよりな空気が一掃されたかのように笑顔が戻る。なんか俺っちが誘った時とは違ふねとは思つた順平。その心を読んだかのように、

「順平はストレートすぎるんだ。だからナンパも失敗するんだろう。」

「

「あれは、真田さんがやらかしたからでしょ！」

と、小声での言い合い。ナンパしてたとはい、ここでは言いづらいからである。

「まあ、そんなことは今はいい。黒沢巡査への差し入れをどうするか決めてないのだからな。」

真田が言い合いを打ち切る。と、ゆかりからの提案。

「じゃあ、私が作ったケーキ1切れはどうかな。」

「え、ゆかりっち、ケーキ作れんの？てゆうかなんで作ったの？」

順平の頭にはてなが浮かぶ。

「作れることは作れるわよ。理由は言わないけど。」

「ああ、そうかそうか……。」

順平にほんのわずかな冷や汗。そして、2人がクリスマスを一人で過ごす羽目になった理由はすでに分かっていたが、黙っていた。

一行はポロニアンモールで、黒沢巡査に差し入れを終えた。ちなみに巡査はケーキをもらったのがうれしかったのか、クリスマスだから、といってそれぞれの武器をタダでくれた。ちなみになぜか風花はロープを買っていった（無論タダで）。

「さて、差し入れを終えたことだし、寮に帰りますかあ。」

順平は陽気に戻る。

「それじゃあ、準備しないと。」

「ケーキ残った奴とまだ1ホール分、私の冷蔵庫にあるけど誰が参加するか確定しなくちゃね。」

といいながら、ゆかりは少々残念そうな笑みを浮かべる。

「公子ちゃんは？」

風花が切り出す。

「荒垣さんの所の病院だつてさ。」

順平は答える。

「天田君は？」

「遅くなるつて、メールが来たぞ。」

今度は真田。

「あ、俺はいいぞ。海牛で牛丼食つてくからな。」

「明彦、空気を読まんか。」

美鶴のたしなめ。しかし、真田はクリスマス特製があるからと言って足早に去ってしまった。

「……リーダーは、友達と過ごすとか言ってたね。」

「じゃあアイギスは。」

今度はゆかり。

「え、ええ…あ、メンテナンスだつてさ、先に帰ったよー。」

順平が答える。棒読み気味だ。するとゆかり、風花の間で何かがはじけた…ような音がした。

「今日つてメンテの日だったけ。」

「いや、私の耳には入っていないんだけど。」

「いやいや、特別にメンテしなきゃいけなくなっただよ。ほら、修理がまだどうか言ってたじゃないか。」

順平は冷や汗掻きまくりで、何とか、まくしたてようとする。

「そんなことよりさ、寮に戻ろうぜ。はやくゆかりっちのケーキ食つてみたいからな。ああ、あはは。」

「あれ、リーダー？」

あーと順平は頭を押さえた。湊は遠くでアイギスと並んで歩いていた。また2人の間で何かがはじけた。

「リーダーに声かけようか。」

「いや、邪魔することはないぞ、風花。アイギスは2週間も彼と会っていなかったんだ。しかも今日明日は聖なる日だ。せめて、今日ぐらいは二人だけの時間を作つてやつてもいいんじゃないか。」

ナイス、桐条さん。と心の中でグッジョブする順平。

「いや、いつも2人だけなのは気のせいかなあ。」

ゆかりは少し怒気をはらんでいる。

「アイギスがクリスマスだからって何をしていいわけではないですよね美鶴先輩。」

「まあ、そうだが。」

ゆかりに邪悪な考えが浮かぶ。

「おい、ゆかり。なぜ私たちがこんなことしなきゃいけないんだ。」

「アイギスが変なことしないように見張るためです。」

ゆかりが答えなければいけないに風花が答える。ゆかりはその通り

だとうなずく。

今彼女たちはポロニアンモールの広場裏にいる。ここからだとな人には気付かれず、様子を観察できる。

「声が聞こえないなあ。」

「無茶いな。風花のペルソナ使えばいいだろ。」

言っただけはつとした順平。

「ダメだよ、そんなことしたら気付かれちゃう。」

風花の答えに順平は安堵。すると、2人に動きがあったようでありはじつと湊とアイギスの動向を観察する。

「湊君アイギスからケーキもらったみたいね。って、私とかぶってるし。」

ゆかりの不満ゲージがたまる。

「食べてる。食べてる。ん……………？……………！なに、あのシチュエーションー！」

湊はアイギスに食べさせてもらっている。いわゆる”あーん”というやつだ。

「ずるいずるい。私だってあんなことしたことないのに…。」

「大丈夫、私もしたことないから。」

慰めになってない。

「クリスマスって、あんなことするものなのか。」

「あんまりしない気がする。」

美鶴と順平のすこしばかりずれた会話。

しばらくの間眺めていたが、最後の一口まで湊はアイギスのあーんを受け続けていた。その間、ゆかりと風花の不満ゲージが少しずつたまる。

「今度は湊君からか。携帯音楽プレイヤーねえ。なんかイマイチ。彼らしいけど、もつといいものがあるでしょうに。高級バッグとかさ。」

「ゆかりっち。女らしいけど、それを求めている時点で負けている

ぞ。」

それを聞いてゆかりは石になったかのように動かなくなる。相当順平の言葉が効いているみたいだ。

「長いね…。」

「長いよ…。」

「長いぞ…。」

「長げーよ。」

2人を監視すること約3時間。デート中の2人はお話し中。よくここまで話題が出るもんだと4人はあきれる。

「おい、ゆかり、そろそろ帰らないか。こんなことをしていても無駄だと思うだが。」

「不祥事を起こされてもいいんですか。」

「有里なら大丈夫だろう。」

完全に美鶴は興味を失っている。夜9時の寒さが4人を包み、体温を下げる。風花の小さいながらも一生懸命(?)な声が放たれる。

「！二人に動きがあったみたいです！あれは…。」

ゆかりは素早く、順平と美鶴はしぶしぶと覗く。

「おお！あつあつうー」

順平が思わず感嘆の声を漏らす。いわゆる2人——湊とアイギス——はキスをしていた。が、それをゆかりと風花は許すはずもなく不満を一気に募らせる。さすがに美鶴は破廉恥だというような顔をしていた。

「ぐあー我慢できない…。」

ゆかりは今にも彼らにとびかかりそうな勢いだ。そしてそれを知らずに放った順平の発言ががゆかり、風花、美鶴の不満ゲージのリミットをオーバーさせる。

「お、アイちゃん、湊を押し倒したぞ。」

ぱつっんと3人の間で何かが切れる音。そして湊達に怨念を送るか

のように見る。

「処刑方法はどうするか。」

「せっかくロープ買ったからまずしばりつけなくちゃ。」

元から縛るために買ったんだと突っ込みたくても突っ込めない順平がいる。口は災いのもと、後悔後先に立たず。そう、3人は今、恐怖の死神となりつつある。

「あのう…、湊達、動いたんですけども…。」

もう後戻りができないと踏んだ順平。足が小刻みに振動している。

「そう…。」

今一人が死神となった。

巖戸台。白河通り。すでに順平を除く3人はすでに雰囲気が違う。すれ違う人たちはあわてて顔を隠す。店の人たちはみな顔をそむける。順平はおずおずと3人についていく。

ちなみに湊とアイギスはそんなことはしらない。

二人はあるいかがわしいホテルの前で止まる。入ろうとするアイギスに抵抗を見せる湊。だが、そんな2人がどのような行動をとろうが、ゆかり達にはもはや関係がなかった。順平はやばいと感じ、ゆかりを止めようとする。…失敗。ゆかりではなく風花の怨念のこもった腹パンをもろにくらう。風花ってそんなに力があつたっけと思つた順平だが、意識はもう消えてしまった。3人を邪魔するものはもういない。

「させるかあ!!」

ゆかりが矢を放つ。運よくアイギスの体には当たらなかったものの、足元の地面に突き刺さり周りの地面がほんのわずかに盛る。3人は2人の前に立ちはだかる。

「とりあえず寮に戻ってもらおうか。処刑はそのあとだ。」

美鶴の威厳ある声。

「アイギス、だめだよ…。うん…。」

風花の嫉妬らしい声。

「散々いちゃいちゃを見せつけてくれたわね…。」
ゆかりの怨念らしい声。

「さて、まずありさ…。つと、にげるな！」

2人は逃走を始めた。ゆかりたち3人は追いかける。粘り強く追う3人。

10時半。3人はくたくたになって寮に戻る。いまだに2人は捕まっていない。美鶴はラウンジを、風花は2階、ゆかりは3階。ちなみにラウンジで暇をしていた真田と天田は4階で探す羽目になったが、見つからない。多分しばらくは見つけられない。

「ふう。何とかごまかしたよ。アイギス、兄ちゃん…。まあ、お熱いこと。」

病院から帰って部屋でゴロゴロしてた公子は2人をかくまっていた。ちなみに、湊はアイギスの手ほどきを受けている最中。

「ぶはあ。順平の奴、怖くなって言ってしまったのか。」

「仕方がないでしょう。あんな鬼のような形相をされれば私だって言ってしまう。さて、続きをしますよ。一番のプレゼントは私…ですから。」

「勘弁して…。」

「ああ、私もいつか荒垣さんと…。」
のんきな3人。

血眼になって探し続けるゆかり達と、楽しみ続けるアイギス達。ちなみに順平は、白河通りで倒れていたということで鳥海先生と、悪夢のクリスマスを送る羽目になった。

主アイi n クリスマスイブ（裏）（後書き）

順平の扱いがひどくなっていると気が付きましたが気にしない方向で。

ではまた来年。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5331z/>

主アイSS集

2011年12月26日14時49分発行